

文化財 やまと

大和町文化財保護協会発行



七鈴五獸鏡

謡曲

「くるす桜」と大和町

野 田 直 治

今から約一五〇年前、天保一〇であることが分かる。清雅は「長

年二月二五日、江州三上藩主遠藤 滝寺執帳」や同「真鏡」等に見え

但馬守（元郡上藩王子孫）の代参る法琳院清雅のことで、文筆に関

として、家臣吉沢長蔵の一行が久心の深い宿老であった。くるす桜

留主妙見宮（現在の明建神社）には、村瀬本の外に、天理大学図書

参拝した。妙見神社は東氏および館と法政大学図書館に別本が所蔵

その後継者である遠藤氏が氏神とされていて、それぞれ少しずつ相

して尊信した神社である。この日、違点があるが、大筋は同じである。

吉沢は但馬守寄進として雄剣一振次に村瀬本によって「くるす桜」

りと駿馬一匹（ただし代銀四三匁）の大意を見ることにする。

を神前に奉納した。そして神主栗 登場人物 シテ（主役）花守り

飯原豊後方で休息し、宝物・記録 の老翁 ワキ北国の

等を一見したが、その中で植生新 旅僧。後シテ 東常

助所蔵の謡本「くるす桜」という 縁

の注目し、主君但馬守に見せた 場面 前場 郡上粟栗の里、桜

いからといって借用して帰った。 の花盛り、昼から夕暮れ

「くるす桜」は久留主妙見宮の まで

桜という意味で、現在は八幡町村 後場 同場所、同日の夜

瀬家に保存されている。奥書に「 から夜明けまで

時に宝暦九卯年七月一日、豊島助 春もなかなば過ぎ、北国の一旅僧

之丞筆跡を以てこれを写す。法眼 が濃州郡上に来て、 風に桜の散

清雅七十歳」とあり、朱印が押し りくる古びた神社を眺めながら、

であるので、長滝寺僧清雅の筆写 昔東常縁と宗祇が「花盛り所も神

消す。

（後場）その夜、旅僧が花の下で 仮寝していると、花の下まで月光

が輝いて月宮殿もこんなであろう かとばかりである。するとふしぎ

や、更けゆく月の影 よりもさらに優美な

武將の姿が現れてき た。疑いもなく、こ

れは東常縁である。

常縁は彼の代表作「 東路や都の空の恋し

さにふけて眺むる夜 な夜な月」を口ず

さみながら昔の思い 出を語ったが、さて

自分は風流への執着 が悟りのさまたげと

なつて成仏できずに いたが、いま花の縁

により貴僧の法力を 受けて迷いの雲が晴

れたと喜んで、姿は

花の間へ消えていった。

この謡曲の舞台になった桜並木

は現在も健在である。「樞大門」

と呼ばれる長い参道（二三〇余メ

ートル）の両側には老木若木合わ

せて百十余本もあって、毎年みこ

とな花のトンネルを作り、夜桜が

特に美しい。優美な甲冑姿の常縁

が、月光に照されながら、いまに

道」の神髄を話しかけてくれそう

である。



大和町の古城跡について

岐阜県文化財保護
協会事務局長

林 春 樹

ただいま、野田先生からご紹介をいただきました林でございます。私は他に何の取り柄もない、ただ城一途に生きて来ただけの男であります。だいぶん前のことですが、ご当地の教育委員会の方から、大和町にはたくさん城があるので見に来ないか、とのことで見せていただいたわけでございます。

城とは 皆さんの、城というすぐ名古屋城とか岐阜城、郡上でいえば八幡城のように天主閣のあるのを城と見てみる人が多いがこれはあやまりで、天主閣というのは、城の付属物である。城という字は土へんである。土は大地、もう一つの意味は、民を表している。つくりの成は戊と丁を合わせた作ったもの、丁はたたく、才は矛の意で武器を表している。また成の下に皿を書く盛るという字になる。ご飯を盛って杓子でたたくて固める。例えばお仏飯を盛る

岐阜県の城 岐阜県には、中世

から近世へかけてのものが約六五〇〜七〇〇ほどある。城は大体川を利用して築かれている。岐阜県の場合、揖斐川水系に約二〇〇、長良川水系に約一五〇、木曾川水系に約一〇〇、飛騨の庄川、宮川水系に一〇〇、土岐川水系に一〇〇ほどある。調査すればまだまだあると思われるが、岐阜県には城が多い、しかも優れた城が多い。

郡上の城 長良川水系の上流と和良川（飛騨川）それに石徹白の九頭竜川水系に二つ三つ。これらを概観すると、高鷲村に鷲見城及びこれに付随する岩など、白鳥町では前谷・長滝・鳥帽子・二日町原口・六ツ・前原の各城、八幡町には、八幡城と尾壺・赤谷・東殿山の各城、相生の中山城、小駄良川に沿って、和田原つば城・明方川に沿って、吉田・久須見・寒水・畑佐・口長尾の各城、美並村には深戸・菊安・高原・福野・河合・下田・木尾の各城、和良筋には境山城など郡上には、たくさん城があった。これらは時代がそれぞれ違つて造られたのであって、一時に皆あったということではない。

では最も古い城はどこかという、八幡町の尾壺山にあった城、次が鷲見城、それから中山城などであろう。鷲見氏のいた高鷲方面には古くから城が造られていた。そこへ東氏が郡上へ来て、それから東氏関係の城が多くなった。鷲見氏は大へん力があり、牛道川を境として以北に勢力を張っていた。そこへ東氏が来て阿千葉に城を構え、そしてこの城を守るために中津屋・大島に砦を造り、大間見に松尾城などを造った。東氏は現在の和町だけだけでなく北にも南にも城や砦を造って、家臣や身内の者を配置したのである。

城造りの手順 ここで少し築城の手順について述べておきたい。(一)地選り どこに城を造ったらよいかを見定めること。今なら航空写真とか測量機械もあるが、そうしたものの無い時代に、よくもこんな要害の地を見つけたものとはほとんど感心させられるほど地の利を得た所に城が造られている。

ことではない。土木工事のことである。今でも道普請という言葉が残っているように、堀を掘ったりその土を盛って壘を造り、石垣や道を作ることで、これが終われば築城の仕事の大部分は終わったことになる。その責任者を普請奉行という。

四作事 建物を造ることで、この責任者を作事奉行といった。近世では建物に重点をおくようになったが、中世では建物には重きをおかなかった。それは一度戦いが始まれば、焼いたり、焼かれたりしたので、立派なものは建てなかったのである。

城の構造 次に城の構造のうち疑問点を二〜三解説しておく。城には「大手」と「搦手」とがある。大手は表門であり、正面のことである。搦手が攻めて来る方向である。搦手は逃げ口のことである。戦いあらずとみれば搦手から逃げる。城にとって搦手は、まさかの時に生き延びるための大切なもので、全滅を救うための逃げ口、引き揚げ口が搦手である。そして大手は川に面し、搦手は山つづきの方であった。次に城には「曲輪」というのがあつた。いくつかに区切られた

城の場合には建物を造る

(二)縄張り 今でいうと青写真を作ることで設計することである。いろいろ違った地形をどのように取り入れて築城したらよいかを検討して設計する。

(三)普請 城の場合には建物を造る

城の中が一つの広場であつては、敵に攻めこまれた時に防ぎようがないからで、一つの囲いを破られなくても次の囲いで防ぐことのできるようになってゐる。曲輪の周囲には堀や、前面に柵を設けて、容易に二の丸・本丸に近づけないようになってゐるのである。

また敵が攻めて来るのに攻め難くするために、山の斜面を横に堀を掘って、道をカットしたのを「堀切」という。これがつづいてゐるのを「横堀」といった。これは大和町の城にはない。山の斜面に沿って掘ったのを「堅堀」といって大和町の城に多く見られる。阿千葉城の本丸のすぐ裏側にあるし籙脇城の堅堀は有名である。

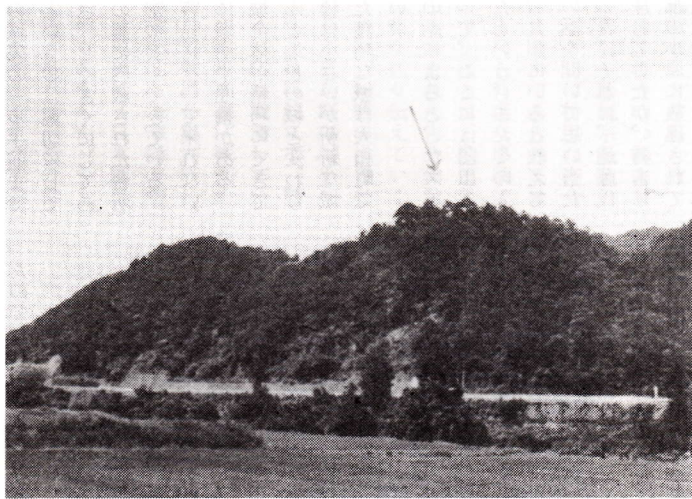
大和町の城

●阿千葉城 これは東氏が郡上に来て最初に築いた城である。この城の大手は北の方で、中津屋の方が正面、すなわち大手であつて、鷲見氏及び越前に対してゐる。長良川、和田川が自然の堀の役目をしてゐる。搦手は山つづきの南の方である。支えきれない時は、剣の方面から籙脇城に入ることのできるようになってゐる。阿千葉城は東胤行の子行氏が造つた城で、時常・氏村と居城し、氏村の時に

籙脇城を築いて移つた。また胤行も晩年には、鎌倉からここに来てゐる。

●籙脇城 この城については、皆さんの方がよくご存じのことです。説明するまでもないと思つてゐる。

が、近年その館跡が発掘されて立派な庭園が出てきて国の指定になつたと聞いて喜んでゐる。この城の特徴は何といつても堅堀である。しかし、疑問に思ふことは、東氏は関東武士で郡上のような険しい地形にはなれていないのに、よくもこの堅堀ということを書いて計画し得たかということである。ついで思い起こすことは、



阿千葉城跡遠望

越前朝倉の一乗谷城である。一乗谷城には籙脇城と全くよく似た堅堀があるが、県下では、ほかに堅堀のある城はない。いづれにしても、こうした城の

九代目の常縁のころであつた。そして時代は戦国時代に入る。籙脇城を拠点とずて発展してきた東氏であつたが、地理的にも政治的にも今や籙脇は郡上の中心ではなくなつた。そこで常慶は八幡の赤谷山（現在の山）に城を築いて移つたのである。

●松尾城 東氏は下総から多くの家臣を連れてきた。野田・日置・河合等々、その野田氏が入つてゐたのが松尾城である。今残つてゐる跡は、ほんの一部であつて、大部分は、道路となり、また家が建つてゐる、大間見川が天然の堀となつてゐて、土塁の一部も残つてゐる。搦手は山を登つて籙脇城に通ずる方向であつた。

●高冠城 栗巢と古道の間にある標高八一、五mの山上にある城が高冠城である。城は高い山の間に三つの峰が交つた所にある。こんな高い山に造られたのは、源平時代のものかと思つて登つて見たら、予想に反して、新しいものであつた。岩を掘り割つて堀が造つてある。土塁もちゃんとある。堀は新しい感じで、この城は造つたけれ共使わないで終わつたものであるうか。作り方としては戦国時代の作り方である。籙脇城が駄

目になつた時に、ここに逃げ込むために造られた城と考えられる。こうした城を「詰城」といふが、このほかには、ここに城を造る理由は考えられないし、戦国時代にここに城を造るような武将もいない。もちろん今後研究も進められるであろうが、私としては、籙脇城の詰め城であつたとしか考えようがない。また広場があるが、これは馬場であつた。馬場といふと馬の調教をする所と思われがちであるが、馬を連れて引き上げるために設けられたのも馬場といつた。籠に馬をおいて、人間だけ山の上にしたのでは、いざという時に馬を連れて逃げる事ができない。そのため山の上にも馬場が必要であつた。郡上でも馬場のある城はたくさんある。牛道の六ツ城・二日町城・中山城・菊安城など、そのほかにも馬場のある城は多い。

またもう一つ、大和町ではまだ確認していないが、城には肥壺がたくさんある。炭焼窯とよく間違えられがちであるが、子細に見ればはっきり分かる。郡上で最もよい肥壺が残つてゐるのは深戸城である。大きさは直径三m、深さ三mから四mくらいのものである。時間もないので詳しい説明はで

きないが、高冠城がある高い山の
上にあつたのである。皆さんは高
い山の上まで登っていただく必要
はないが、あの山の上に立派な城
があつたということは覚えておい
てほしいものである。

●木越城 木越城は、東氏並び
に郡上郡の歴史上、篠脇城に次い
で重要な城である。この城は篠脇
城主東元胤の末弟遠藤盛胤を長良
川筋の押えとして居させたのが始
まりであつて、篠脇城の枝城であ
つた。曲輪があり、そこへ行く手
前に長い堅堀があつて、曲輪へ直
かに行くことができないようにな
っている。この城で特に注目され
るのは、阿千葉城や、篠脇城より
時代が遅れているので、城の造り
方が違つていて、近世上期の走り
になるような構えである。この形
を枳形という。同じ東氏の城でも
この辺の城になると、進歩が目立
つてくる。また立派な河原石で築
いた石垣も残っている。下の長良
川から一つ一つ連んで造つたもの
であろう。そしてこの城が遠藤氏
本家の城なのである。

●神路城 この城は篠脇城の裏
口を流れている神路川の入口にあ
つて、篠脇城を守る重要な位置に
ある。この城は誰が作つたのか分

からない。あの山の下を通るたび
にいつも気になって仕方がなかつ
た。そこで登つてみると、まこと
に見事な城であつた。しかも築城
の縄張りを見ると、大和町の城の
うちでは最も新しい造り方の城で
ある。近世の城郭の一步手前まで
きている。というの堀切にしてあ
り、わざわざ、じぐざぐにしてあ
るし、本丸の裏に内蔵された台所
あたりが非常によくできている。
また下から容易に上つて来れない
ように諸所に堀切や曲輪がある。
そのほか、城全体が精巧にできて
いて、ほとんど近世の城と変わり
がない。規模は小さいが斬新な城
で、こうした精巧な城は大和町で
は外にはない。

土地の人の話によると、ウスナ
メの城といつて、ここには臼田と
いう人がいたという。またその人
の子孫は今、九州にいと教えて
くれた。この話を聞いて思い当た
ることがあつた。それは、遠藤氏
は郡上を制圧していたが、秀吉に
よつて加茂郡の小原に放逐されて
その後へ稲葉貞通が八幡城主とな
つた。稲葉氏は、遠藤氏が旧領の
郡上をいつ取り戻しに攻めて来る
かも分からないので安心してきなか
つた。そのため稲葉氏はたくさん

の枝城を造っている。相生の中山
城も造り変え、荊安城も堅固にし、
和良の境山に城を造り、そのほか
にも枝城を造っているが、八幡の
北方には一つも城を造っていない
そこで私は、神路城は稲葉氏が造
つたのではないかとひらめいたの
である。今のところ、それを裏付



松尾城跡

その時には郡上の人もたくさん連
れて行つたと思われる。そこで神
路の伝承の話を聞くと、これは、
ひよつとすると、稲葉氏が北方の
守りのために、この神路城を造つ
たのではあるまいかと考えたわけ
である。今のところ、それを裏付

である。だから神路の人がこの城
ける確証は何もないが、私にはど
うしてもそう考えられるのである。
は臼田という人がいたんだと、そ
うしてその人の子孫が九州にいと
ちよつと話ほうまくできずぎてい
つたすばらしい城であることは間
違いない。
●その他 そのほかに内ヶ谷の
関ヶ原合戦が終わつてから九州の
臼杵(五万石)へ転封になつた。金
山に「池原城」というのがある

そうであるが、まだ見ていない。
折があれば見せてもらいたいと思
っている。
以上で大和町の城の概略がお分
かり願えたと思う。城は政治・文
化・宗教等あらゆるものの中心を
なすものである。篠脇城があつて
今日の大和町があるといつても過
言ではない。名古屋城も初め清洲
にあつて、それを徳川家康が名古
屋に持つて行つたからこそ、尾張
名古屋は城で持つといわれる今日
の名古屋市がある。岐阜でも大垣
でも八幡でも然りである。大和町
の皆さんも、この意味で城を大切
にし、壊さないように願いたいも
のである。現に美並村では荊安城
が、東海北陸自動車道のため壊さ
れてなくなることになったそうだ
が、こうしたことは、地元民の熱
意で防止できるのではないだろう
か。また城跡に「○○城跡碑」と
いうような城跡の標を建てていた
だくとよいと思う。知らない人も
あるのでこうした標を建てて保存
していただければまことに結構な
ことと思ひます。長時間の御静聴
を感謝して私の話を終わります。
(昭和六二年四月二五日 本会総
会の記念講演要旨。文責者 有代
信吾)

京都・奈良

文化財見学旅行

有代 信吾

一月二日朝七時、一行二三名が大和町を後に、京都・奈良への一泊二日の旅に出発した。見学箇所は、京都では醍醐寺と法界寺、奈良は、薬師寺・市街北方の古墳群・平城宮跡資料館・二月堂・三月堂・手向山八幡宮・そのほかであった。どの見学箇所も感銘深いものであったが、特に印象に残った二、三について記してみたいと思う。

京都では日野の法界寺、都の巽井戸や聖人の袍衣塚などがある。日野の里は、鄙びた閑静なたたずまいの中に埋まるようにして在った。境内の池の横で記念写真を撮る。この寺の本堂は薬師堂であるが、国宝に指定されている藤原時代、仏師定朝作といわれる丈六の阿弥陀如来の安置してある阿弥陀堂を拝観する。いっお参りしても変らぬお庫裡さんの懐中電灯を持つての説明である。この阿弥陀さまは、寄木造りの漆箔で慈容のお

この法界寺であると、お庫裡さんの説明である。

ここに誕生された聖人が九〇年のご生涯をかけて、真実の教え、凡小の者も修し易く愚鈍の者も信じ易い真宗を開かれたのである。ここがそのご誕生の地かと感慨入の思いでお参りしたのであった。

奈良では、実に幸いなことは、万葉植物園の西川廉行先生のご案内をいただいたことである。奈良市の北西隅の御陵町にある松と紅葉の間を縫って、歴史の道をたどることしばし、やがて大きな池の畔に着く、水上池というのだそうだ。ここで西川先生は大きなふるしき包みの中から色々な文献を取り出して私たちに見せながら、奈良の歴史やあたりの景観などについて約一時間熱心に説明して下さい。その一端をかいつまんで紹介しよう。

この池の端に垂仁天皇の皇后日葉酢媛命の御陵の入り口がある。西川先生は、現存する刊本のうちでは恐らく最古のものといわれる寛永年間の「古事記」をとり出して、垂仁天皇の前の皇后沙本媛と日葉酢媛との葛藤のくだりを読んで説明される。私もこの古事記を手にとりて見せていただいた。何

だか歴史の重みのようなものをずしりと感ずる。この御陵と接近して成務天皇の御陵もあるが、いずれも陵墓として宮内庁の管轄であるので、中へは入れない。さらに「歴史の道」という道標のある歩道を北に進むと、御陵や古墳がいっぱいある。小山と思ったら、前方後円墳で長さ二〇〇mくらいのこと、この池の周囲には、仁徳天皇の妃盤之媛命とか、ほかは名前が忘れだが、いずれもしっとり

と静まり、山の緑と紅葉が池の水に映えて、たとえようのない美しさである。さらに西川先生

は奈良の御陵の絵図面で元禄一六年に画かれたのを見せて下さる。ずい分、たくさんあるのに驚いた。前方後円墳という名称が初めて出ているのは、蒲生君平の書いた「山陵志」とかという書物だとも教えていただいた。



法界寺にて

思いでの

いろは歌留多

村井正蔵

いろはかるたも、その時により色々なものが出回ったようだ。その中で私達の子供の頃に（大正末期より昭和の初期）出ていた「かるた」を今思い出そうとしても、なかなか思い出せなかった。でもなかなかよい文句であり、子供が成長して社会人となってからも、幾多の教訓を与えているところに当時の幼児教育の姿があるかのように思われ、集めてみた。

と 年寄りの冷や水
ち ちりも積れば山となる
ぬ 盗人の昼寝
る 瑠璃も玻璃も照らせば光る
を 老いては子に従え
わ 割れ鍋にとじ蓋
か かったいのかさくらべ
よ 葦のすいから天のぞく
た 旅は道連れ世は情
れ 良薬は口に苦し
そ 総領の甚六
つ 月夜に金をぬく

ね 念には念を入れ
な 泣きつらに蜂
ら 楽あれば苦あり
む 無理が通れば道理ひっこむ
う うそから出たまこと
ゐ 芋の煮えたもご存しない
の のど元すければ熱さ忘れる
お 鬼に金棒
く 臭い物には蓋をせよ
や 安物買いの銭失い
ま 負けるが勝ち
け 芸は身を助ける
ふ 文はやりたし書く手は持たず
こ 子は三界の首枷
え 得手に帆をあげ
て 亭主の好きな赤烏帽子

あ 頭かくして尻かくさず
さ 三べん回ってたばこにしょ
き 聞いて極楽見て地極
ゆ 油断大敵
め 目の上のたんこぶ
み 身から出たさび
し 知らぬが仏
ゑ 縁は異なもの味なもの
ひ 貧乏ひまなし
も 門前の小僧習わぬお経読む
せ 背に腹はかえられぬ
す 粋が身をくう
京 京の夢大阪の夢



炎の熱の情のこしのおと



新能「くるす桜」実行委員長

木 島 勘 逸

謡曲「くるす桜」は、八幡町の村瀬家に写本が残っていましたが最近になって奈良天理図書館と法政大学の蔵書の中にも見つかり、重ね合わせてようやく解読することができました。宝暦九年（一七五九）以前に作られたものである

よって現地であるこの妙見の地で初上演できるまでになったことは、何にも代えがたい大きな喜びとするところであります。さて、今から約五百年前の文明三年、時の篠脇城（大和町・牧）の城主・東常縁（とうのつねより）が、連歌師、飯尾宗祇（い のうそけい）に行った古今伝授（こきんでんじゆ）は日本史上でも有名な事柄です。古今伝授とは、歌道最高の手本とされた古今和歌集の奥義を代々伝えていくものですが、和歌の世界は常縁から宗祇を経て、上は天皇から下は町民まで、階級を超えて広く浸透していくこととなります。戦国の世にあって歌道を集大成し、その本流を伝えた常縁の功績は、後の世に「日本国の誉」と博されました。

ことは明らかですが、作者は不明で、当時、謡われていたり、能として演じられていたりしていたかは定かではありません。この度、関係者の方々の大きなお骨折りにより、「くるす桜」を復曲、当代一流の能楽師の方々に

現在、歌の世界は新しい歌人の出現などもあって、ちょっとしたブームを巻き起こしており、素人

目には一つの転機を迎えているようでもあります。ここ大和町においても、東氏館跡発掘以来、東氏の文化が見直され、歴史民俗資料館の建設・史跡の里公園の整備と「古今伝授の里」づくりが進んでいます。こうした時を同じくしていれば「古今伝授の薪能」を開催できることには、何とも因縁めいたものを感じずにはおられません。この薪能の開催で、あたかもそのかがり火が燃え盛ることく、町づくり・町おこしの情熱の火が、さらに大きな炎となって燃え上がることを願ってやみません。

薪能次第

- 午後五、四五 神事（神上り杉）
- 六、〇〇 お練り出発
- 六、一〇 み社あがり
- 六、一五 能「翁」
- 六、三〇 仕舞
- 六、五〇 火入れ式
- 七、〇〇 狂言「隠し狸」
- 七、二〇 休憩
- 七、三〇 能「くるす桜」
- 八、三〇 終了

※雨天の場合、能「翁」より

昭和六十二年 事業報告

- 四月七日 役員会
「文化財やまと」原稿募集について。新年度事業計画立案について。その他
- 四月一四日 規約改正小委員会
規約改正立案
- 四月二一日 役員会
規約改正案決定。総会提出議案の審議。その他
- 四月二五日 総会
昭和六一年度事業報告、収支決算の承認。昭和六二年事業計画並びに収支予算の承認。記念講演 大和町の古城跡について。岐阜県文化財保護協会事務局長林春樹先生
- 五月二〇日 名血部沢池の湿地帯植物を牧・母袋に移植
- 六月八日 文化財見学（参加三〇名）
高沢観音・伊深正眼寺・吉田観音・刀匠の里・弥勒寺跡・蓮華寺・真長寺・慈恩寺等
- 八月一日 役員会
ぎふ中部未来博前売入場券の売さばき促進について
- 一〇月二二日 役員会
研修旅行計画について
- 十一月二日～一三日 京都・奈良文化財見学（二三名参加）
京都 醍醐寺・法界寺
奈良 薬師寺・古墳・平城宮跡
資料館・二月堂・三月堂
手向山八幡宮他
- 六月三二日 役員会
昭和六二年事業報告並びに収支決算中間報告・昭和六三年事業計画並びに予算案審議・総会開催計画「文化財やまと」原稿募集・その他

文化財の愛護に

ご参加下さい

○文化財は、祖先が遺してくれた貴重な公共財産です。わたくし達の身近かな所にある数多の文化財を、みんなの力で護ってゆきましょう。

○大和町文化財保護協会が発足してから一三年目を迎え、会員は一四九名に達しています。なお多くの方々に参加していただいて本会の発展を期したいと思っております。どうかお友達などに声をかけてお誘いくださいませよう。○本会会員は、岐阜県文化財保護協会会員でもあり、会員には、岐阜県文化財保護協会発行の「濃飛の文化財」（年二回）をお届けします。本会会報「文化財やまと」をお届けします。その他、県本部主催の見学会、講演会、研究会に参加でき、文化財見学に参加できます。会員には会費二〇〇〇円を添えて事務局（大和町教育委員会）へお申し込みください。



俳句

猫柳 日置 繁

手の届く限りへ寄せて春炬燵

猫柳枝泳がせて水太る

末黒野や両手に携げる里心

ブドウ棚に鉄線を張り夢育つ

空高し東寺の塔の逆光に

藪 椿 田中 裕

七草を一本一本洗ひけり

フレームの中の盆梅さかりなり

藪椿音をひそめて落ちにけり

どうだんを見上げて一人静かなり

秋立つ日田圃の水を抜きにけり

薄水 黒岩きくゑ

二月の水底くらみ奥良長

壁掛のあせし朱の房呀返る

老木を一廻りして春惜しむ

ビール飲む女にはなきのど仏

うぶすなの薄氷一步一步かな

落葉 山田昌枝

男下駄履きて恵方に手を合はず

お手玉の唄忘れをり梅の家

真すぐに蜘蛛のぼりゆく雲の峰

秋祭袴の紐をしめ直し

地にふれてより音たてて落葉かな

木の葉髪 小池弥栄子

女正月はじめて唄ふ演歌なり

高ぶりし心をおさふ沈丁花

あと暫の月と見てこの世送らんか

七五三泣く子もカメラにポーズとる

好奇心のまだ残りけり木の葉髪

初鮎 木島 泉

雉子啼くや一揆籠りし城の跡

行春や野面石寂ぶ原城跡

初鮎の焼かれて反りて憎明り

わが丈の溺るるばかり秋すすき

冬天の哭かねばふかし寒ざくら

秋日和 横枕千代子

初詣筆筒の匂ひそのままに

松の内過ぎて久しき鏡拭く

颯の声静まりて闇の濃し

急カーブ車湧きくる秋日和

看りつつおせち料理のことやなど

川灯台 有代信吾

早春の川灯台に靄溜り

斑鳩の壺の反りに花吹雪

河骨の花一つずつ隠れ沼

百日紅社叢の中を明るくす

駅にきて雪沓の雪落し合ふ

短歌

大門 桜

有代信吾

永き世のうつろい眺め咲きつきし

大門桜今宵散り敷く

大門の桜並木の下ゆけば

久しき友につきつき逢うも

幾百年伝えて杜に木霊する

はやしばんぼと子らの高声

東氏館跡

土松新逸

幾百年埋れていし石の列いまは現
つの陽にひかるなり

遠祖ら血を流しけん館跡かたわら
に真赤くひがん花咲く

古えの日本の文学まもりませし東
常縁いま在すがに

名勝となりし庭園和歌の家東氏代
々住み給いたる

石の並び撮らんと向けばそれぞれ
にも言う如しわれを囲みて

くるすの里にて

金子 徹

興亡の時は流れて七百年

高き木立に宮居静けし

畑中 浄園

古い桜くるすの里に花ひらく

愛別離苦のすがたとどめて

木島 泉

参道に灯ともしあれば遠つ世の

うたびとも来よ花散らぬまに

矢野原幸子

爛漫の花うつし身にあそばせて

なる子鳥きく百千鳥聴く

日置智恵子

並びたる館の跡の石組みに

偲びてやまぬ遠つ世の祖

會員名簿

(氏名) (役名) (順序不同) (電話番号)

山下 運平 (顧問)	二四〇六
山下 眞一	二〇三一
山下 眞一	三四九五
河合 俊次 (理事)	二二四六
河合 康蔵	三五〇七
畑中 定夫 (理事)	二一六八
畑中 久江 (理事)	二五七六
小池 眞雄	二二九三
池田 憲三	二二八二
山下ふみえ	三三二七
日置 智夫	二七三〇
加藤 正恵	二一〇七
高橋 明	二四八八
日置 照郎	二〇七二
加藤 文蔵	二八〇二
佐藤 光一	三二〇一
田中 裕 (理事)	二二〇〇
高橋 義一 (理事)	三七九二
青木 卦二	二二九二
河合 恒	二二五八
河合 芳英	二二〇四
奥村千代子	二〇二二
尾藤 房子	三二九三
塚原富美子	四一四三
加藤 勝二	三六八七
大間見一	二二八五
野田 直治 (顧問)	二二八五
野田 茂 (理事)	二二八五

青木 新三 (監事)	二四三六
村井 正蔵 (理事)	二二二三
日置 繁 (理事)	二二五四
大野 隆成	二二三〇
大野 紀子	二二三〇
小池八重子	二二〇七
日置 幸雄	二二七〇
野田 英志	二二八五
小野江選量 (理事)	三三七六
清水 一作	三〇八六
山下 直美	三九三八
藤沢五三郎	三一六六
池田 充彦	三〇九〇
小野江 勉	二七二五
池田 栄枝	二二八五
池田 恒純	二二七九
日置智恵子 (理事)	三〇五二
松井 直 (理事)	四〇八五
松井 博	三五〇八
坪井 政夫	四〇九二
坪井 庄市	三五〇四
古田 忠	四〇九〇
井口 一男	四〇二〇
佐藤 秀夫	四〇〇一
松井 賢雄	三九九一
藤代 順行	三〇六〇
小間見一	三九六五
田代 俊雄 (理事)	二五四七
田中 吾一	三〇三七
島崎 英二	三〇三七
平沢 勤	三九三七
一 万 場	二四四一
畑中 浄園 (副会長)	二四四一
畑中 真澄	二四四一

石神 堯生	二四一三
稲葉 春吉	二五〇三
黒岩きくゑ	二四六〇
桑田 和子	二四一九
桑田 渥見	二四四六
桑田 信夫	二四一八
黒岩 弘巳	二四五八
三島 秋男 (理事)	二四六一
井上 昌保 (理事)	二五二一
井保 初枝	二七五八
算 明代	二五三二
一 徳 永	二〇二二
木島 泉 (副会長)	二〇二二
木島 観一	二〇二三
鷺見 鈴子	二〇〇五
鷺見 おと	二一八九
直井すゞ江	三五九二
矢野原幸子 (理事)	二〇七七
鷺見 ゆき	二二八九
田中まさを (理事)	二〇六七
山内喜久子	二六一六
水野 治	二六一〇
木島 洋女	二五九一
土松 新逸 (理事)	二七三一
遠藤 賢逸	二二二一
渡辺 明夫	二六九五
木島 三郎	三五九〇
畑中 文枝	二三八二
矢野原吉夫	二一三九
一 河 辺	二〇五二
清水 貞子	二〇二一
清水美佐子	二〇一九
清水 幸江 (理事)	二〇一九
田中喜一郎	三四一〇

尾藤 元子	二二四七
岩谷ますの	三三六七
横枕千代子 (理事)	二三八九
前田 孝	二二〇一
前田 鈴	三六六六
白田とも子	二二五〇
一 神 路	二〇八三
森 忠敬 (顧問)	三三七〇
白田 尊徳 (理事)	二二一四
山田 真人	二二一四
羽生 清	二二七一
一 牧	二七〇五
滝日 準一 (理事)	二二六二
粟飯原高照	二七二九
土松 康二	二六六二
日置 貞一	三九八〇
土松 貞二	三六三六
日置 昇	三九二二
松森 益吉	三三〇六
滝日 治	三三〇六
遠藤 光平	三九八一
遠藤 米吉	三六三七
齊藤 大門 (理事)	三九二二
加藤 一男 (理事)	二八七〇
清水 定	二七一〇
日置 一朗	三六七四
遠藤 周一	二八九〇
田口 勇治	三九五〇
日置 元衛	三四一七
粥川 溜	三三八七
本田 欽一	三一六〇
滝日 義一 (理事)	三〇六二
金子 徹	三四二六

一 栗 巢	二二三六
島崎 増造 (監事)	四〇四一
増田 洋子	四〇三一
算 政之助 (理事)	二七二八
中山周左工門	二二八四
武田 信康	二七八八
鷺見 豊夫	四〇二七
野田 光誠	二七九五
一 古 道	三八六一
松井 弘雄	二七九五
細川 優 (理事)	二七九五
一 名 血 部	二七九一
有代 信吾 (理事書記)	二二〇一
有代 和夫	二二〇一
尾藤 由	三三三〇
森下 正則	三三九一
下広 茂一	二七〇六
一 島	二六八四
森藤 幸 (会長)	二二二二
森藤 雅毅 (理事)	二四八〇
奥田 保次	二六六七
此島 広 (顧問)	三六四八
須稿 甚一	二五五四
山田 長次 (理事)	二七九一
山田 昌枝	二七二八
森 数雄	三五八二
山田 良一	二六六二
山田 良	二一三三
松井 京二	二一三三
直井 篤美	二一三三
一 白 鳥 町	二一三三
玉井 秀夫	二一三三

昭和六十三年 事業計画

一、会議

- 総会開催 五月一四日(土)
- 役員会開催 七・一二・二・三の各月及び臨時会
- 執行部会の開催 随時

二、研修及び見学

- 講演会(総会記念講演) 薪能のあらまし
能楽師 後藤孝一郎先生
○ぎふ中部未来博見学 七月一二日(火)
- 歴史民俗資料館見学 五六月中
- 文化財見学 二月または三月中、大阪方面(一泊)
- 県本部主催の研修会に参加
- その他臨時に文化財見学

三、会報

- 「文化財やまと」の発行 B五版八ページ〜一四ページ 三〇〇部

「文化財やまと」第一三三号

昭和六十三年三月

日発行

発行者 大和町文化財保護協会

代表者 森藤 幸

印刷者 白鳥タイプ印刷

昭和62年度 収支決算報告

項目	予算額	決算額	増減	摘要
収入の部				
1,繰越金	121,633	121,633	0	
2,会費	288,000	292,000	4,000	144名×2,000 前年度未納分4,000
3,特別会費	970,000	725,000	△245,000	関文化財見学 5,000×30=150,000 京都・奈良研修 25,000×23=575,000
4,補助金	43,000	43,000	0	
5,寄付金	0	4,500	4,500	
6,諸収入	3,367	3,486	119	
合計	1,426,000	1,189,619	△236,381	
支出の部				
1,会議費	90,000	55,370	△34,630	
総会費	50,000	29,840	△20,160	
役員会費	40,000	25,530	△14,470	
2,事業費	1,130,000	791,412	△338,588	
研修費	970,000	726,912	△243,088	関文化財見学 149,352 京都・奈良研修 577,560
会報発行費	70,000	0	△70,000	
湿地植物移植	90,000	64,500	△25,500	
3,事務局費	50,000	20,810	△29,190	
消耗品費	10,000	0	△10,000	
通信費	15,000	10,410	△4,590	
旅費	10,000	0	△10,000	
その他	15,000	10,400	△4,600	
4,負担金	150,000	143,000	△7,000	
5,予備費	6,000	0	△6,000	
合計	1,426,000	1,010,592	△415,408	

翌年度へ繰越金 179,027円

昭和63年度 予算案

項目	予算額	前年度予算額
収入の部		
①繰越金	179,027	121,633
②会費	1,138,000	1,258,000
会費	288,000	288,000
特別会費	850,000	970,000
③補助金	45,000	43,000
④寄付金	1,000	0
⑤諸収入	2,973	3,367
合計	1,366,000	1,426,000
支出の部		
①会議費	90,000	90,000
総会費	50,000	50,000
役員会費	40,000	40,000
②事業費	1,090,000	1,130,000
研修費	950,000	970,000
会報発行費	140,000	70,000
湿地植物移植	0	90,000
③事務局費	36,000	50,000
消耗品費	5,000	10,000
通信費	15,000	15,000
旅費	10,000	10,000
その他	6,000	15,000
④負担金	144,000	150,000
⑤予備費	6,000	6,000
合計	1,366,000	1,426,000

編集後記

◇洛陽城東桃李の花。

飛び来り飛び去って誰が家に
落つ。洛陽の女兒顔を惜しみ
行く行く落花に逢うて長く嘆息
す。……年々歳々花相似たり。
歳々年々人同じからず。

春くるたびに思い出す唐詩の一
節。長い寒さを過ぎて、会員の
皆さんお元氣のことでしょうか。

◇会報第一三三号をお届けします。

「大和町の古城跡について」は、
昨年の総会での講話の筆記録で
すが、講師林春樹先生のご厚意
によって載せさせていただきました。
おん礼申し上げます。

◇私たちが、かねて願っていた
ました「歴史民俗資料館」がい
よいよオープン運びとなりま
した。今後は内容の充実を願
ってやみません。

◇新能「くるす桜」の実演にむか
って、実行委員の方がたが着々
と準備を進めておられます。委
員長の木島勘逸さんに、とくに
原稿をいただきました。

◇気候の変わり目です。会員諸氏
のご健勝を念じ上げます。

(畑中記)